

スズキの種苗生産について

増殖室 八木秀志

スズキは学名を*Lateolabrax japonicus* と言い、大きくなるにつれてセイゴ、フッコ、スズキと名前の変わる出世魚として知られています。定置網、底曳網、建網などで漁獲され味の良い高級魚として、種苗の人工ふ化が望まれてきました。

このため、本県では平成3年度からスズキの種苗生産技術開発に着手し、平成4年4月には生産された稚魚6千尾(全長27mm、ふ化後80日目)を伊予灘に放流しました。

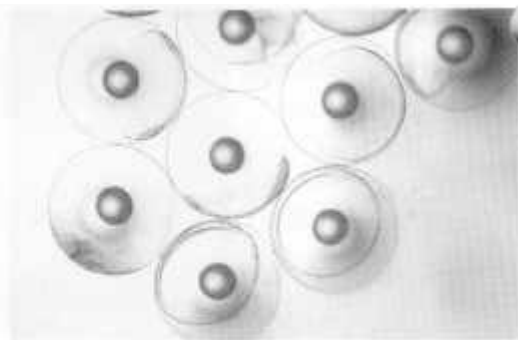
次に、その種苗生産の経過を述べてみます。

1. 親魚及び採卵、ふ化

スズキの産卵期は12～1月ですので、11月下旬から12月下旬にかけて天然で漁獲された親魚を水槽に搬入します。この時、親魚が成熟していない場合は蓄養し成熟を待ちます。腹部が膨満し成熟した雌を順次取り上げ採卵を行います。採卵は雌の腹部を搾り、卵をポリ容器に受けたのち、精子をかけ海水とともに、かき混ぜて受精させます。数分間放置後、海水で卵を十分に洗浄します。卵(直径1.2～1.3mm)は分離浮遊卵であるため、水面に浮いています。換水率(1日50%)、微通気、水温16℃の状態にしてふ化を待ちます。受精からふ化まで約1週間の間、毎日卵を顕微鏡観察し、死卵が多いものや発生にバラツキがあるものを除き、良質な卵のみを選択して生産に使用します。当场では平成4年1月に100万粒採卵し、そのうち良質な卵90万粒から40万尾の仔魚をふ化させました。



採卵風景



受精卵

2. 仔・稚魚飼育

ふ化仔魚(全長4.3mm)は飼育水1トンあたり10,000～15,000尾の密度で収容し水温16℃で飼育します。餌として、ワムシをふ化後2～40日目まで、アルテミア幼生を32～80日目まで、配合飼料を30日～取り揚げまで与えます。また飼育環境を安定させるため海産クロレラ(ナンノクロロプシス)を約2週間添加します。当场では平成4年1月に、10トンコンクリート水槽2面及び5トンFRP水槽1面にふ化仔魚を計40万尾収容し、4月に稚魚6千尾(全長27mm)を生産しました。

3. 残された問題点

1) 良質卵の確保

スズキはマダイやヒラメのように、産卵期間中に卵を何回も産むのではなく、1度に産んでしまいます。このため卵を搾出するタイミングが非常に難しく、良質卵をなかなか得られません。今後は、ホルモン処理で成熟を促進させ良質卵を確保したいと考えております。



2) 稚魚の骨曲がり(脊柱がV字型に屈曲)

スズキのふ化仔魚は、ふ化後5～6日目に水面で空気を飲み込みウキブクロを形成します。このとき水流や通気が強かったりすると空気を飲み込むことができず、脊柱がV字型に屈曲してしまいます。今後、さらに飼育環境の改良に努め、骨曲がりを防止したいと考えております。

3) 歩留まりの向上

スズキのへい死率が最も高いのは、ふ化直後ですが、全長が15mmを越えてからも僅かずつへい死が起こります。この原因として餌料の栄養的な不足等が考えられますので、今後は稚魚の生理学的、栄養学的見地から歩留まりの向上を目指してゆきたいと考えております。